噛んで

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
噛んで

【Ｎコード】
Ｎ６６４４Ｋ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
眞人は光に告白しようとする。だが緊張のあまり何度も何度も噛んでしまい。それで告白は成功するのか。告白は何時でも緊張するものです。

第一章

噛んで

告白すると決めるまでにも。それこそ命懸けであった。

黒田眞人は気が弱い。見れば顔もそんな感じだ。

目はかろうじてわかる程度の奥二重であり流線型に横に伸びている。色白で少し面長である。鼻立ちも口元も女性的であり眉がはっきりとした黒色なのが何とか男性的と言えるものであった。ただしその眉は細めであり決して太いとは言えないものである。背は一七〇で身体は細い。やはり男らしさに薄い様子である。

髪は黒くそれを結構長くしている。その彼が必死な顔で言っている。

「あのさ、本当にさ」

「そこまでいくのにもだよな」

「苦労したんだよな」

「そうなんだよ」

まさにそうだと話すのである。

「本当にさ」

「まあ御前にしたらな」

「凄い勇気だよな」

それは周りも認めることだった。学校の庭で緑の芝生の上に座りながらあれこれと話をしている。眞人はそこで皆を前にして話しているのだった。

「告白するなんてな」

「ラブレターも書いたんだよな」

「そうなんだよ。書くのでもな」

さらに言う眞人であった。

「苦労したんだよ」

「勇気がいったんだな」

「そんなになんだな」
「そうなんだよ。あのさ」
彼はまた言う。ダークグレーのブレザーと赤いネクタイが似合っているがそれでも今はそんなものは誰も見ないでそのうえで話をしているのであった。
「相手はさ」
「あれだろ？神楽だよな」
「あいつだよな」
「そうだよ。あいつだよ」
まさに彼女だというのである。
「神楽光な」
「っていうか御前とあいつってよ」
「中学一緒だろ」
そのことを話すのである。
「三年間同じクラスだったよな」
「そうだけれど」
「じゃあ何の気兼ねもしなくていいじゃないか」
「なあ」
「気心知れた相手だろ？」
「それでもだよ」
眞人は言うのだった。
「あいつのことを意識しだしてからな。どうもな」
「それだとか」
「意識して変わったんだな」
「そうなんだよ。何かさ」
こう皆に話すのである。
「変わったんだよ」
「で、ラブレター書いて来て欲しい場所も書いてか」
「それでか」
「そうなんだよ。来てくれるかな」

彼は不安に満ちた顔で言うのだった。
「あいつ本当に」
「神楽だろ？意地悪じゃないしな」
「そうだよな。はきはきしてる奴だしな」
「何か言われたらそれに返すしな」
「絶対にな」
その神楽の性格である。皆そのことを話すのである。
「来ることは来るだろ」
「そういうのすっぽかしてそれで終わりにする奴じゃないさ」
「だよな、それだと」
「それは安心しろよ」
それを聞いてまずは安心するかといえばだ。眞人はまたしても不安に満ちた顔で不安に満ちた声を皆に対して出してしまうのであった。
「いや、来てもな」
「来ても？」
「それじゃあ」
「いや、告白受けてくれるかな」
今度の心配事はそれであった。それを言ってまた不安に満ちた顔を見せるのである。

第二章

「あいつそれで」
「そこまでわかるか」
「っていうか読めるか」
周りは呆れた顔で突っ込みを入れるのだった。
「そこまでな」
「わかったら凄いよ」
「そうか」
「そうだよ。とにかく行け」
「話はそれからだ」
とにかく彼の背中を押すのであった。その彼をだ。
そしてそのうえで。さらに彼に問うのである。
「それで告白の時だよ」
「何時なんだ？」
今度はそれを尋ねるのであった。
「それでだけれどな」
「何時告白するんだ」
「今日だけれどな」
いきなりであった。皆それを聞いて今度は呆れた顔になって言うのであった。
「おい、今日かよ」
「それはないだろうがよ」
「ないかな」
眞人はわからない面持ちのまま周りに問う。
「ねえよ、せめて明日って言えばよ」
「心の準備ってのがあるだろ」
「どうなんだよ」
それを話すのだった。

「とにかくよ。それじゃあな」
「もう行け」
言葉は強いものになった。
「行け、特攻だ」
「当たって砕けろ」
「当たってか」
「そうだよ、いいな」
「ぶつかれ」
そんな話をしてそのうえで向かわせるのであった。彼等はもうそれしか言えなかった。しかしだからといって彼を突き放したわけではなかった。
「よし、それで場所はだ」
「何処なんだ？」
「図書館の裏だよ」
そこだというのである。
「そこな。放課後な」
「そうか、あそこか」
「あそこなんだな」
「それで放課後か」
皆そのことも確かめたのであった。
そうしてである。そのうえでまた言うのであった。
「じゃあな、まずはな」
「度胸据えて行け」
「度胸って」
「手の平に人って文字を三回書け」
一人がそうしろというのだった。
「それでそれを飲み込む動作をするんだよ」
「それでいいんだよな」
「ああ、とにかくな」
「度胸なんだよ」

「いいな」
皆で言う。そのうえで、であった。
放課後を迎えた。行く場所は一つしかない。その図書館の裏である。そこに向かうのであった。
眞人だけではない。皆も一緒だ。皆は彼を先頭に立てて後ろから言ってきた。
「いいか？それでな」
「度胸据えればいいからな」
「度胸だよな」
「ああ、そうだよ」
「それだよ」
まさしくそれだとまた言う面々だった。学校の中を歩きながら彼に対して言っていく。
「わかったらな」
「俺達が見守っていてやる」
「だから行け」
「ああ、わかった」
こうしたやり取りの後でその図書館裏に入った。そこは右手に図書館の白い壁があり周りには木があったり皐があったりしている。わりかし奇麗な場所である。

第三章

眞人はそこに入った。そして皆は後ろの木や皐の陰に隠れてそのうえで様子を見ている。やがて向こう側から。

「来たな」

「ああ、来たな」

「あいつだ」

「神楽だ」

薄い茶髪でそれを左右でイカリングの様にしている女の子が来た。顔立ちは目が大きくはっきりとしている。口は小さく鼻の形は程よく整っている。背は一六〇程度であり胸は小さいが制服から見える脚は中々奇麗である。全体的にスタイルはいいと言える。その彼女が来たのだ。

「ああ、黒田ね」

「神楽、来てくれたんだ」

「ええ、来たわよ」

まずはこうしたやり取りからであった。

「下駄箱のラブレターね」

「下駄箱って」

「おい」

隠れて見ている男達はそれを聞いて思わず顔を顰めさせてしまった。

「また随分と古典的だな」

「そうだよな」

「ラブレター自体そうだしな」

「何時の恋愛漫画なんだよ」

こんなことも言うのであった。

「ったくよお。何かよ」

「黒田も知らなさ過ぎだろ」

「奥手っていうのか？あれって」
「天然だろ」
こんな辛口の評価であった。だが彼がかなり古い行動を取ったことは事実である。そしてそれは光からも言われたのであった。
「あのさ」
「何？」
「正直びっくりしたわよ」
呆れた顔で彼に言ってきたのである。
「あんなものが下駄箱の中に入ってて」
「そうだったんだ」
「そうよ。それでだけれどね」
「うん」
「言いたいことあるのよね」
こう言ってきたのだった。彼女からである。
「私に」
「そうだけれど」
「じゃあ言って」
呆れているうえに素っ気無い言葉であった。
「何でもね。あんたの言いたいことをね」
「言っていいんだ」
「だからここに私を呼んだんでそ？」
完全に光のペースで話が進んでいた。背は眞人の方が高い筈なのに彼女の方が大きく見える程である。それは後ろのギャラリーの評価だ。
「おいおい、完全にな」
「そうだよな」
「向こうのペースじゃねえか」
眞人の側に立っての言葉である。
「こりゃ駄目かな」
「失敗するってことかよ」

「ああ、まずいんじゃないのか？」
こう話されるのだった。物陰に隠れながらひそひそとである。
「あのままじゃよ。コクっても玉砕じゃねえのか？」
「確かにな。怪しいよな」
「それにだよ」
さらに話されるのであった。
「コクれるのか？あいつ」
「それ以前にか」
「それができるかか」
「ああ、できるのかよ」
そのことも話される。
「あんな状況でよ。できるか？」
「言われてみれば怪しいよな」
「顔真っ青じゃねえかよ」
彼の顔を見ても話す。確かに蒼白になっていてしかも表情も強張っている。今にも倒れそうとはまさに今の彼の為にある言葉であった。

第四章

「あんなのでよ。いけるか？」
「まずいだろうな」
「かなりな」
皆そう思うしかなかった。今の彼を見ているとだ。
そして光の方からまた言ってきたのであった。
「それでよ」
「あっ、うん」
「私に言いたいことは何よ」
またこのことを尋ねてきたのである。
「それで」
「あのさ」
言われて何とか言葉を出した。そんな感じであった。
「いいかな」
「ええ、いいわよ」
「俺、実は」
蒼白になりながらもじっと彼女の顔を見てそのうえで言うのであった。
「じ、実は」
「実は？」
「お、おおおおおお」
緊張のあまり声が震えている。
「お、おま、おま、おま」
「お饅頭？」
「ち、ちが、違うよ」
声が震えるだけでなくところどころ噛んでしまってもいた。
「ちが、違うんだって」
「じゃあ何なのよ」

「す、すすすすすす」
「すき焼き？」
光はまた言ってきた。
「すき焼きは好きよ」
「そうじゃない、そ、そうじゃ」
ここでまた噛んだ眞人だった。
「そうじゃなくてさ」
「じゃあ何なのよ」
「好き、好きなんだよ」
蒼白だった顔がである。一気に赤くなった。それも真っ赤にである。
「好きなんだよ、神楽の・・・・・・」
またしても噛んでしまったのだった。
「神楽のことがさ」
ここまで言えた。そして。
「だからさ。よかったら」
「わかったわ」
光はここまで聞いてだった。自分から言ってきたのであった。
そうしてそのうえで。こう答えたのである。
「それじゃあね」
「それじゃあ？」
「喜んで」
微笑んで彼に答えた。
「その言葉受け取るわ」
「受け取るって」
「だから」
今度は怒った顔を見せてきた。八重歯が見える。小さな可愛らしい八重歯もまた彼女のその個性を表すものになっていたのであった。
「女に何度も言わせないの。いいって言ってるのよ」
「じゃあ俺と」

「あのね」
ここで光はその頬を赤らめさせて言ってきた。
「そもそもね」
「うん」
「何でここに来たと思ってるのよ」
こう言うのであった。
「ここにまでよ」
「それは」
「下駄箱に手紙」
今度はこのことを指摘した。
「こんな古典的な方法で何かってわからない女の子はいないわよ」
「いないんだ」
「絶対にいないわよ。すぐにわかったわよ」
「じゃあそれがわかって」
「そうよ、来たのよ」
両手を自分の腰の横にやってむくれた顔をして眞人に話す。

第五章

「あんたが何の用で呼んだのかわかってね」
「それで来たってことさ」
「最初から受けるつもりだったのよ」
「嘘・・・・・・」
「嘘じゃないわよ。嘘っていうのならね」
完全に言い返しモードであった。
「今時下駄箱にラブレターって時点で嘘・・・・・・よ」
「あれはまあ」
「あのね、あんたね」
さらに言う光であった。
「大体普段から私ばっかり見てたでしょ」
「それは」
「すぐにわかるわよ、それも」
「まあそうだよな」
「普通はな」
「ああ」
隠れて見ている男達も彼女のその言葉に頷く。
「あいつ仕草滅茶苦茶わかりやすいしな」
「それ考えたらな」
「神楽も鋭いしな」
それでばれない筈がないということであった。
「まあそうなるよな」
「そうだな」
「あいつだけわからないけれどな」
「本人だけはな」
そういうことであった。そうして光の言葉はまだ続いていた。
「いい？それでね」

「うん」
「ここで来てあんたの告白を聞き終えたらね」
話がそのことに戻っていた。
「受けるって最初から決めていたのよ」
「そうだったんだ」
「ただしよ」
ここで言葉が付け加えられた。
「若しも」
「若しも？」
「あんたが最後まで言えなかったり」
一つのケースではある。
「逃げたりしたら」
「その時は？」
「受けないつもりだったわよ」
その場合は、というわけであった。
「その場合はね。けれどあんたちゃんと告白してくれたわよね」
「うん」
「それならよ」
ここで合格だと言ってきた。
「いいわ。私だって喜んでね」
「有り難う」
「全く」
彼を横目で見ながら溜息を出しながらの言葉であった。
「世話が焼けるわ。けれど今からね」
「俺達付き合うんだよね」
「そうよ。私はあんたの彼女で」
「俺が神楽の彼氏で」
「神楽って呼ぶのは止めてね」
早速こんなことを言う光であった。
「彼氏と彼女になったんだから」

「じゃあ何て呼べばいいのかな」
「光って名前で呼んで」
いきなりであった。

第六章

「それで呼んでくれていいから」
「それじゃあ」
「そうよ。私もあんたを名前で呼ぶからね」
そしてそれは彼女もであった。
「いいわね、眞人」
「うん、光」
お互いに名前で呼び合う。
そうしてであった。また光から言ってきた。それは。
「じゃあ早速ね」
「早速？」
「デートしましょう」
彼女からの誘いであった。
「デートね。いいわね」
「デート・・・・・・」
「付き合ってるなら当然じゃない」
それはもう規定路線であると。そうした言葉であった。
「だからよ。行くわよ」
「デート、俺と神楽・・・・・・いや光が」
「そうしたかったんでしょう。私もだし」
ぽろりと本音が出てしまっていた。それでまた頬を赤らめさせる光であった。しかしそれでも彼女はさらに言葉を続けていくのであった。
「じゃあ。今からね」
「うん、それじゃあ」
こうして光に引き摺られる形で眞人は図書館裏を後にした。見守っている男組から見れば舞台奥にと消えていく。二人が消えた時もう世界は夕方になってしまっていた。

彼等はそれを観終わってだ。物陰から出てそれぞれ言い合った。
もう隠れている必要はなくなっていた。
「とりあえずはな」
「そうだよな」
「ハッピーエンド」
「だよな」
それはわかった。とりあえずはだが。
「これでいいのか」
「とりあえず告白成功したしいいんじゃないのか？」
「まあそうなるよな」
結果を考えればそうである。しかしである。
眞人の頼りなさと光の全てを察したうえでの一連の発言や行動を思い出して。彼等はこうも言い合うのであった。
「しかしなあ」
「何かな」
「あれでいいのか？」
「完全に神楽のリードだったよな」
そのことを言い合うのであった。それぞれ首を傾げながら。
「もうな」
「どう見てもな」
「あいつ完全に読まれてたしな」
「だよなあ」
「まあそれもな」
「当然だしな」
あらためて彼のそういったことへの不甲斐なさにも思いを馳せるのであった。
「あれだけわかりやすかったらな」
「そうだよな」
こんな話をして今は誰もいなくなった空間を見る。そこには確かに今は誰もいない。しかし余韻は残っていた。彼等はその余韻を見

て話すのであった。
「実ったからいいか」
「そうだな」
それはいいとしたのであった。眞人の恋が実ったことはだ。それはいいとして彼等もその場を後にした。何はともあれ眞人は光に自分の告白を受け入れてもらった。終わりよければ全てよし。例えその先がどんなかかあ天下だったとしても。

噛んで　　完

２０１０・１・１６

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6644k/

噛んで

2010年10月8日14時59分発行